

生きることに意味がある

——大変だけども面白い社会をめざして



NPPO 法人 相模原理事長
東八幡キリスト教会 牧師
奥田知志

「自分は生きる意味がある人間か？」——私たちが感じてきた無言の圧力。相模原事件の犯人である彼もまた、その言葉に怯えながら生きてきた二人ではなかったか。逮捕拘留中の植松被告と面会した筆者は、今もなお、終わらない宿題を抱え続けている。牧師であり、ホームレス支援に長年取り組んでこられた奥田知志さんによる書き下ろしメッセージ。

ひとりのいのちは地球より重いか？

先日ある高校でのこと。「ひとりのいのちは地球より重い」と言いますね」と話し始めたが、反応は無かった。会場には六〇〇人ほどの高校生がいたが、この言葉を知る生徒は二人だけだった。

一九七七年、日航機がハイジャックされ、バングラデシユのダッカ空港に強制着陸させられるという事件が起きた。日本政府は人質解放を優先させ、身代金や海外逃亡など犯人側の要求を承諾した。総理大臣だった福田赳夫氏が語ったのが、先の言葉であった。一四歳だった私は、「この国はいい国だ」と思った。あれから四〇年以上が過ぎ、この言葉は継承されなかったが。

確信犯ゆえの衝撃

二〇一六年七月、相模原市の障害者施設で起きた事件に、大きな衝撃を受けた。重い障害のある人びとが虐殺されたのだ。一九人死亡、二三人負傷という結果の重大さもさることながら、彼が「確信犯」であったことに私は驚愕した。「悪いことだと承知で罪を犯す人」を「確信犯」と呼ぶことがあるが、本意は違う。「確信犯」とは「悪いことでない」と確信して罪を犯すこと」であり、つまり「良いことをしていると確信して罪を犯す」のが確信犯である。彼は何を確信していたのか。「障害者は不幸しか生み出さない」「障害者は生きる意味のないいのち」。彼は障害者殺害を「日本と世界の経済のためにやる」と語った。

事件の詳細が明らかになるにつれ、一つの事件を思い出した。一九八三年、横浜において中学生らがホームレスの男性を殺害した「横浜「浮浪者」殺人事件」である。ホームレスという言葉がまだなかった時代の話だ。当時一八歳だった私は、同世代の犯行に驚愕した。だが、それ以上に衝撃を受けたのはその動機

おくだ・ともし

一九六三年生まれ。関西学院神学部修士課程、西南学院大学神学部専攻科をそれぞれ卒業。九州大学大学院博士課程後期単位取得。一九九〇年、東八幡キリスト教会牧師として赴任。同時に、学生時代から始めた「ホームレス支援」に北九州でも参加。事務局長等を経て、北九州ホームレス支援機構（現 抱撲）の理事長に就任。これまでに三五〇〇人（二〇二〇年三月現在）以上のホームレスの人びとの自立を支援。

なぜ、あの言葉は継承されなかったのか。もはや「言わずもがな」となったからか。それとも「そんなことを言っても、実際に大切になれるいのちと、そうでもないいのちがある」という現実を子どもたちが知ったからか。残念ながら後者だと思

う。二〇一九年九月、「戦後最強」とも言われた台風一九号が接近していた。「いのちを守る最大限の努力」が呼びかけられる中、東京のある区でホームレス状態の人が避難所に身を寄せようとしたが拒否された。彼は嵐の中に戻されたのだ。「区民しか入れない」と説明されたそうだが、実際には外国人や旅行者は避難を許されていたことが後日判明した。「ひとりのいのちは地球より重い」は、もはや昔ばなしなのだ。

であった。「横浜の地下街が汚いのは浮浪者がいるせいだ。俺たちは始末し、町の美化運動に協力してやったんだ。清掃してやったんだ。乞食なんて生きてたって汚いだけでしょうがないでしょ。乞食が減って喜んでるくせに。」彼らもまた「確信犯」だった。彼らは、ホームレス襲撃を「町の美化運動」と呼び、「喜ばれる（良い）こと」だと考えた。「ホームレスは町のごみ」という意識は現在も蔓延しており、各地でホームレス排除や支援施設の建築への住民反対運動などが続いている。住民は、「町の安心と安全を守る」という「良いこと」を掲げ、排除を続けている。おそらく、台風の夜の出来事さえ、担当者からすれば「住民を守るためにやった」と言うだろう。

いのちの意味を問う圧力

いのちに、「意味のあるいのち」と「意味のないいのち」などない。いのちに意味があるのだ。この普遍的価値についてゆるぎなく言い切ることが、現代においては何よりも大切だ。

一方で、「自分は生きる意味がある人間か」という圧力は、同世代を生きるすべての人びとが感じていると思われる。横浜の中学生たちが加害者であることは間違いないが、彼らもまたこの圧力にさらされていたことは間違いない。中学生にとつて「意味の証明」とは何か。その第一は「良い成績を取ること」だ。だが、それが叶わない中学生はどうするのか。他のことでそれ